

「地震動予測地図の防災対策等への活用に関する報告書」項目案

1. はじめに

(ここでは、成果社会部会において、地震調査研究の成果〔長期評価、強振動評価、地震動予測地図〕を国民に分かりやすく伝えるため検討を重ねてきたこと、その検討等を踏まえ、長期評価に確率評価を導入し、信頼度情報を併記したこと、といったこれまでの経緯を記載するとともに、本報告書が「全国を概観した地震動予測地図」の発表に先立ち、それが何で、どのような構成要素から成り、どのような活用が考えられるか、を示すものであることを記述。)

2. 地震動予測地図とは何か

(1) 地震動予測地図

(地震動予測地図の考え方・必要性を説明)

(2) 地震調査研究推進本部が作成する地震動予測地図の種類

確率論的地震動予測地図

シナリオ地震動予測地図 (特徴・利用の仕方をやや詳細に記述)

両者の組み合わせ

(例1) 確率論的地震動予測地図による地点別影響度に基づいて選定された地震動について、シナリオ型地震動予測地図を利用する。

(例2) 確率論的地震動予測地図の中にシナリオ型地震動予測地図を取り込む。

3. 確率論的地震動予測地図の理解に向けて

(1) 確率論的地震動予測地図の構成要素

(確率論的地震動予測地図が「地震発生確率」(長期評価における確率情報)と「地震が発生した際の地震動のばらつき評価」の考えを取り入れているため、地震動予測地図を正確に理解してもらうためには、特に長期評価における確率情報及び地震動のばらつき評価について明確なイメージを持ってもらうことが必要である旨を記述。)

(2) 長期評価(確率情報)の理解に向けて 長期評価を確率情報として伝える必要性

(将来発生が不確実な情報は、確率情報として伝えるしかないことを示す。)

他分野における確率情報の持つ意味

(確率を用いたリスクマネジメントの例など、他分野における確率情報の持つ意味や使われ方を記述し、確率情報に関する理解を深めてもらう。)

長期評価の伝え方

a) 長期評価の意味

b) 長期評価の新たな伝え方

- ・内陸型地震と海溝型地震では確率情報が違う

- ・身近な例との比較(火災、交通事故等)

- ・「何年に一度の割合」を併記

- ・マグニチュードではなく震度情報として伝える(正確さを欠く難点あり)

(3) 「地震動のばらつき評価」の理解に向けて

(地震研究推進本部が作成する確率論的地震動予測地図では距離減衰式のばらつきに基づいて地震動を確率的に評価していることを説明。)

(4) 確率論的地震動予測地図の理解に向けて

(確率論的地震動予測地図が、ある期間に強い揺れに見舞われる確率を提示するものであることを示した上で、どの要素をどの順に説明すれば、全体として分かりやすいものとなるか、を示す)

(確率論的地図では、考えられる地震とそのばらつきを考慮に入れるため、シナリオ型地震より対象地震が広がることを「台風来襲時の予測降雨地域」を例にとって説明)

4. 確率論的地震動予測地図の活用について

(1) 利用の観点から見た確率論的地震動予測地図のメリット

(確率論的地震動予測地図は、ある期間に強い揺れに見舞われる確率を提示しようとするものであり、どう活用すればよいかを提示することにより、国民が自らを取り巻くハザードに対処する手助けとなることを説明)

(特に、複数の地震シナリオが想定される地域の場合には、確率論的地震動予測地図の方が使いやすい可能性があるのではないか)

(2) 確率論的ハザード情報の活用例

(他の確率論的ハザード情報が社会においてどのように活用されているかを紹介)

(3) 確率論的地震動予測地図の活用方法

地震に関する調査観測の重点化の検討

地域住民の地震防災意識の高揚

土地利用や施設・構造物の耐震設計における基礎資料

重要施設の立地、企業施設の立地、地震保険などのリスク評価における基礎資料

その他想定される活用方法

活用主体ごとの活用上の注意 (活用主体による明白な違いがなければ削除)